

第3回 天神と天神さん(一)

天使突抜

第2回の醒泉小学校の東、町名看板「萬壽寺通油小路東入上金佛町」の並びをさらに東へ。万寿寺東中筋の十字路を挟んで、二枚の仁丹町名看板があります。「萬壽寺通東中筋東入天使突抜二丁目」①と「東中筋通萬壽寺下ル天使突抜二丁目」②です。二枚めの看板は、万寿寺通に面して掲げてありますが、本来ならば、東中筋通に面した東側壁面に掲げてあつたはずですが、壁面を改修したときに、移動したものでしょう。二枚とも保存状態がよいので、大切にしていることがわかりますね。

看板の中の「天使突抜」という町名がおもしろい。わたしの乏しい語彙の範囲では、「天使」とは、森永キャラメルの箱に印刷されているような、背中に羽根をつけた「エンゼル」です。しかし、エンゼルでは、京都の、しかも古い町並みには、いかにもそぐわない。また「突抜」というのも、地名としては唐突です。この二つがあわさった「天使突抜」は、一度聞いたら忘れられないくらい不思議なひびきをもっています。この町名の由来は、詮索好きのわたしでなくとも、詮索せざるをえないでしょう。

東中筋通は、豊臣秀吉の「天正の地割」のときに、油小路通（平安京の油小路）と西洞院通（平安京の西洞院大路）の間の南



萬壽寺通 東中筋 東入 天使突抜二丁目 ①



東中筋通 萬壽寺下ル 天使突抜二丁目 ②

北に新設された道。その西側町を「天使突抜」というのは、てんしのやしろ社とよばれていた五条天神宮の境内を突き抜けて道を作ったことに由来します。天使突抜町は、一丁目から四丁目までありますから、この区域（松原通から六条通）が五条天神宮のかつての境内ということになります。

天使突抜三、四丁目のよすがはないかと探し回った結果、西洞院六条のバス停近く、写真屋さんの半地下の車庫の入り口に、「西洞院通六条上ル天使突抜四丁目」③の看板をみつけました。この位置では目に付きにくいので、道しるべとしてではなく、大切な記念に残してあるという感じですが。こんなところにも、仁丹の町名看板に対する、京都人の愛着があらわれていますね。

二〇〇八年に再訪したときに、この近辺を歩いていましたら、

五条天神宮〔天使社〕— 医薬祖神

さて、天使突抜の由来となった天使社こと、五条天神宮は、松原通西洞院の西南のかどにあります。「てんしん」と濁らずに読むのが本来らしく、「てんし」から転じてこのように名づけられたといわれています。現在の社殿はビルに囲まれた一角にあり、境内も駐車場になっていて、往時の面影はありません。しかし、このたたずまいからは想像がつかないくらいに、五条天神宮の記事がたくさんの古典籍に出てまいります。

社伝によると、平安遷都（七九四年）の際に、空海が大和国宇陀郡から天神を勧請したのがはじまりといい、少彦名命を主神として祀っています。相殿は、天照皇太神宮、大己貴命、少彦名命は医薬の祖神とされており、薬の町・大阪道修町にある少彦名神社（神農さん）も、五条天神宮の分霊と中国の医祖である神農氏とを合祀したものです。『都名所図会』巻之二（一七八六年、天明六年の再板本）には、節分に白朮小餅宝船の三種の神物を五条天神宮から禁裏に奉ったとあります。かつては、節分の厄除けに、おけら「白朮」を授けていましたが、現在は、日本最古という宝船図（宝船図の原型をみるような素朴なお札）を授けています。おなじ医薬祖神を祀る、東京上野の五条天神社では、節分には「うけら神事」をおこない、現在でも「うけら餅」として、おけらと餅を授けているようです。

「おけら」は、「をけら」または「うけら」ともいい、白朮または蒼朮と書きます。近縁の根茎を乾燥したもので、色がすこしだけ違います。両方とも「おけら」と称して、古来から薬草として



五条天神宮〔天使社〕

もちいられていました。気を補つための漢方薬「四君子湯」には、人參、甘草、茯苓とともに、白朮が配合され、乳幼児や老人の諸疾患に使用されています。成分表をみたところ、仁丹の丸薬には配合されていないようですが、薬用入浴剤(生薬100%)仁丹の薬湯)には、蒼朮が配合されています。古くは、入梅時に、おけらを焚いて湿気や邪気を払う風習があり、貝原益軒の『養生訓』巻第七(一七二三年、正徳三年)の「悪臭を去る手当」の項に、「悪気をさるに、蒼朮をたくべし」とあります。また、「おけら焚く」あるいは「蒼朮焚く」が夏の季語になっています。

徒然草にでてくる五条天神宮

兼好法師の徒然草の第二百三段では、「勅勘の所に鞍(矢を入れて背負う器)懸ける作法があり、天皇の病氣や世の騷擾のときに、五条天神に鞍を懸けた」と述べています。鞍馬の火祭り有名な由岐神社もこの作法がおこなわれたとあります。由岐神社の祭神は、大己貴命と少彦名命で五条天神宮と共通しており、日本の古層の痕跡が残っているのかもしれない。

義経伝説と五条天神宮

『義経記』には、五条天神が源義経と弁慶の出会いの場所として出てきます。太刀を九九九腰奪い取った満願の日に、五条天神に千本目はぜひとも良い太刀を奪い取れるように祈ったあと、参

道を南へ向かい、築地のかげで参拜人を待ち伏せる場面があります。笛の音をたよりに堀川をくだり、義経と遭遇して、義経と弁慶の決闘がおこなわれることになりました。義経記では、翌日にもう一度、清水の観音で、義経と弁慶が打ち合つたすえ、君臣の契約をするということになっています。

能の『橋弁慶』では、弁慶が五条天神へ丑刻詣でにゆき、満参の日に、牛若丸(義経)の噂を聞くと、いう設定になっています。「牛若丸が強いと聞いて逃げては無念」と、弁慶は五条の橋を待ち伏せます。童謡にも歌われているとおり、決闘の場所は五条の橋の上です。祇園祭の曳き山に「橋弁慶山」がありますが、その趣向は、能の橋弁慶に基づいています。牛若丸が欄干の擬宝珠に高下駄の前歯だけで立っているという、凝つた細工は見ものです。ちなみに、現在の五条大橋は、豊臣秀吉が六条坊門小路を五条通としたとき以来のものです。橋弁慶にでてくる五条の橋は、現在の松原橋です。ただし、「この当時、五条橋(今の松原橋)は架つていなかった」という異論もあるようです。

『都名所図会』には、南東からみた五条天神宮の鳥瞰図が載っていて、東側に西洞院川が流れていることが描かれています。この川に掛かっていた橋が、義経と弁慶の果し合いの場所ではないかという説もあります。当時五条橋(今の松原橋)が架つていなかったとすれば、こちらの説に軍配があがります。いずれにせよ、「義経伝説」ですから、目くじらをたてることもありません。西洞院川は、明治時代に暗渠になって、現在の西洞院通の道幅になります。かつては、この通りをチンチン電車が走っていました。いまは、その路線を50番の市バスが走っています。チン

チン電車の路線とは、一部路線が変わっていますが、五条天神へは、京都駅からこの市バスを使うのが便利です。

『義経記』には、義経・弁慶の決闘の前に（安元元年）、義経と鬼一法眼一派の湛海坊が、五条天神で果たしあつ場面があります。ここでは鬼一法眼が悪役になっていますが、鬼一法眼のもつ兵法書「六韜」を得るために、その末娘を籠絡するなど義経もしたたかです。

源平盛衰記・宇治拾遺物語にも五条天神宮

文覚上人が、一一七三年（承安三年）に伊豆へ配流される船旅で、五条天神の鳥居の根元に勧進した黄金百両を埋めたところをについて、水夫たちの強奪の難を逃れたという話が、『源平盛衰記』に載っています。

文覚上人（一一三九～一二〇三）は、俗名、遠藤盛遠。神護寺中興の祖。北面の武士として鳥羽天皇の第二皇女統子内親王に仕えていたとき、同僚の渡辺渡の妻、袈裟御前に横恋慕し、誤って殺してしまったことを機に、出家（『源平盛衰記』記載の伝承。史実かどうかは不明）。上記の流罪は、神護寺の再興を、後白河天皇に強訴したため。同じ伊豆に流された源頼朝の拳兵を勧めた話は、おなじみのもの。

五条天神宮の森が広大であったのは、『宇治拾遺物語』巻一・一四に、柿の木に仏があらわれるという説話からもつかげえます。延喜の頃（九〇〇年頃）五条天神のあたりに大きな柿の木があり、そこに仏があらわれて大騒ぎになったが、それは大きな「く

そとび」を見誤ったものであったという話。鰯の頭も信心の寓意でしょうか。

松原京極商店街

五条天神の北側の鳥居から、松原通に出たところに、仁丹町名看板「松原通東中筋東入ル天神前町」④がありました。町名の「天神前町」はもちろん、五条天神宮に由来しています。この町名看板の左手には、お地藏さんの祠（側面の屋根の一部が写っています）、右手は喫茶店（英文のポスターが貼ってありました）。不思議に、なんの違和感も無く調和しています。



松原通 東中筋 東入 天神前町 ④

このあたりは、古くからの商店街。すべての店を紹介する余裕はありませんが、すこしだけ。井上漬物店（松原通油小路角）、包装紙には、この近辺の名所旧跡の説明が印刷されており、包みを解いたあと捨てるのもつたいない。梅香庵茶舗（松原通油小路西入ル橋町）のご主人は、日本茶インストラクターの資格をもち、茶（ちや）香（か）服（ふく）（茶歌舞伎、鬪茶）を当世風に洗練して、講習会をおこなっているとのこと。お茶と和菓子はつきものといいますが、松原通の北向かいには、和菓子屋亀山（松原通油小路西入ル橋町）。店頭の招き看板が目印の竹（松原通西洞院東入ル敷下町）は、お好み焼き。写真は、わたくしめが、たこ焼きを店頭で食べているところ。取材に同行した方は、なつかしき冷やし飴を飲んでおります。

この店の向かいには、光円寺（西洞院通松原東入ル敷下町）があり、門前に「親鸞聖人御入滅之地」の碑が建っています。一方、一二五五年（建長七年）火災にあい、五条西洞院（現在の松原西洞院）から、三条富小路の善法坊（善法房）に移ったこと、一二六二年（弘長二年）に、善法坊（一説に押小路南・万里小路東の住居）にて九十歳で入滅したことが伝えられています。入滅の地かどうかはともかく、この石碑の付近に、親鸞がある時期、住んでいたことは確かです。なお、善法坊と推定される場所には、現在、「見真大師遷化之旧跡」の碑（中京区柳馬場通御池上ル東側、柳池中学校内）が建っています。見真大師とは、親鸞の諡号です。

新旧が混然としている商店街は、京都のあちこちに残っています。残念なのは、一般的に、やや活気がなくなってきたことで



招き看板のお好み焼き・竹



「親鸞聖人御入滅之地」の碑

話のついでに、心覚え。宗派に関係なく、釈迦の死去のことを、入滅（にゅうめつ）といい、転じて、宗祖の死去のことも入滅（にゅうめつ）といいます。また、宗派に関係なく、高僧の死を遷化（せんげ）といいます。宗派によっては、釈迦、菩薩、僧の死を示寂（しじやく）ともいうようです。

す。それでも、「親鸞聖人御入滅之地」の石碑の左手にある柱には、「義経・弁慶ゆかりの街」というキャッチフレーズが貼ってあり、二〇〇五年のNHKの大河ドラマ「義経」にあやかっただけで、町おこしするなど、活性化のための努力をしているようです。

松原道祖神社〔五条道祖神社〕

『宇治拾遺物語』巻一・一に道命阿闍梨が和泉式部の許に通つた宵に、読経するところを、五条道祖神の翁が聞くという痛烈な皮肉をこめた話があります。翁がいうには、「今宵は御行水もなさらずに読経されたので、梵天や帝釈天のようなエライ方がお聞きにならない。このため、いつもは聞けない翁でも聞くことができた」と。上手な読経でなくてもよいから、身を清くして読み奉るべきことという説話です。

芥川龍之介は、この説話をもとに、『道祖問答』という短編を書いていました。青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で、筑摩文庫の芥川龍之介全集がデジタルデータとして手に入りますので、興味のある方はご覧ください。

和泉式部（生没年不詳）は、大江雅致の娘。取り巻く男性は、橘道貞、為尊親王、敦道親王、藤原保昌など。恋多くして優れた歌多く、拾遺和歌集や後拾遺和歌集に数多く採用されています。橘道貞との間の娘、小式部内侍も歌人として有名。この親子は、生き方がよく似ていて興味が尽きません。そのうちに、このシリーズで、もう少し詳しく取り上げることになりました。

道命（九七四―一〇二〇）は、藤原道綱の子で、藤原兼家の孫



松原道祖神社〔五条道祖神社〕

にあたります。美声で「法華経」読誦がうまいと評判の僧で、天王寺別当などをつとめました。残した歌は、色好みの片鱗がうかがえます。『後拾遺和歌集』には、熊野詣でに詠った歌に続けてあわせて三首採られています。この三首の並べかたも、なにやら意味深長ですね。最初の二首を引用してみましよう。

熊野へまいるとて人のもとにいひつかはしける
道命法師
わするなよわするるときかばみ熊野の

浦のはまゆふ恨みかさねん

後拾遺和歌集卷第十五・雑一・八八五

おもはんとたのめたりける人のさもあらぬけしきなりけれ

ば、よみ侍りける

わすれじといひつる中は忘れけり

わすれんとこそゆふべかりけれ

後拾遺和歌集卷第十五・雑一・八八六

『拾遺都名所図会』巻一には、「道祖神社」として、「新町通松原の角、人家の裏にあり。今首途神と称す」と記載されています。現在は、新町通に面した西側（新町通松原下ル敷下町）に移っています。境内は狭いながら手入れが行き届いているのを、最初はいぶかしく思っていました。が、「地元の敷下町と富永町の有志で宗教法人をつくり管理をしていて、住民が交代で清掃していること」を知って納得しました。最近は何歳をとったせいか、常識では考えられないような犯罪を見聞するたびに、「地縁が薄くなつたためにもたらされた殺伐とした世相」を痛感します。ここは、そんな世相とは対極にある地域の姿だと、大げさでなく感じました。

松原新町は、かつては十念の辻と呼ばれていました。「南無阿彌陀仏」を十回唱えることを十念といいますが、江戸時代に、獄舎を出た死刑囚が、この辻で十念とともに引導を渡されて、粟田口の刑場に向かったそうです。いまは、この歴史も、人々の記憶からすっかり消えています。

日本で最初の小学校

松原道祖神社の新町通を挟んで向かい側には、元の修徳小学校（新町通松原下ル富永町）があります。廃校になった小学校を建て替えて、下京修徳ふれあい福祉会館として利用しています。京都市下京図書館、特別養護老人ホーム、京都市修徳児童館などが併設されており、東南の万寿寺通に面したところは、児童公園となっています。



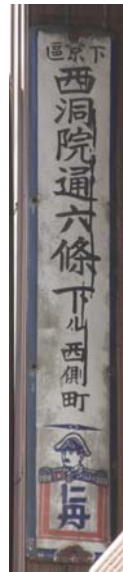
元の修徳小学校（明治天皇行幸の碑）

修徳小学校は、下京十四番組小学校として一八六九年（明治二年）に日本で最初に授業がおこなわれた小学校の一つです。新町通万寿寺上ルに「明治天皇行幸之地」の碑が建っています。残念ながら、一九九二年に洛央小学校に統合廃止されました。

京都市では、第1回の界限にある元有隣小学校、第2回でふれた元格致小学校、今回の元修徳小学校の例のように、廃止された小学校の転用をいろいろと模索しているようです。

六条商店街

町名看板③のある西洞院通を南へ、六条通との十字路の南西のかどには、町名看板「西洞院通六條下ル西側町」⑤がありますので、六条通から南は、町名が変わって、西側町。



西洞院通 六條 下ル西側町 ⑤

六条通を東へ一筋、六条若宮の十字路の東北のかどに、さらに「六条通若宮東入上若宮町」⑥、東南のかどの駄屋の裏手に、「若宮通六條下ル若宮町」⑦の看板があります。この十字路を南に下がったところに（今回の略図にははいりませんが）、若宮八幡宮（若宮通花屋町上ル若宮町）があります。左女牛八幡とも呼ばれ、長く源氏の崇敬を集めておりました。若宮八幡宮は、一六〇六年（慶長十年）に東山五条に移転していますが、もとの鎮座の地にも社が残っています。この移転は、「天正の地割」と連動していたと考えられます。若宮通は、「天正の地割」のときに、西洞院通（平安京の西洞院大路）と新町通（平安京の町尻小路）との間に新設された、南北の道で、若宮八幡宮にちなんで名づけたもの。六条通は、新町通で突き当たって、南に折れて、少し下ったところから、さらに東西に続きます。ここも、松原京極商店街と同様に下町の商店街。路地のように細い道の両側、だいたい六



六條通 若宮東入 上若宮町 ⑥



若宮通 六條 下ル 若宮町 ⑦（駄藤の南裏の駐車場）

条油小路から六条室町までが商店街になっています。六条通は、魚之棚と呼ばれ、東西の本願寺の門前町として栄えたところです。江戸幕府第八代の吉宗の享保年間（一七二〇頃）には、錦棚（現在の錦商店街）、下之棚（現在の正面通）とともに、京の三棚と呼ばれたほど繁華なところだったそうです。

漬物屋「総本家近清」（六条通西洞院西入ル西側町）は創業明和元年（一七六四年）の老舗。添加物なしの漬物が名物。和菓子「梅月」（六条通西洞院東入ル東側町）。ゆず萬寿、柏餅（味噌餡、漉し餡）など。京なまふ「駄藤」（六条通若宮東入ル上若宮町）は、六条若宮の十字路の東南のかど。町名看板⑥の向かい、店舗裏には町名看板⑦があります。創業は、嘉永六年（一八五三年）。「笹巻駄」は特製の駄まんじゅう、「牡丹ゆば」は湯葉でいろいろな具を包んだ一品。

話のついでに。京都の街を歩いていて気がつくのは、
 辻々の地藏祠。それから、郵便局もよく目につきます。今
 回の京めぐりの界限にも、六条通東中筋西入ル北側に六
 条郵便局。若宮通松原下ル西側にも、若宮松原郵便局が
 あります。



プロフィール

藤田眞作(ふじたしんさく)。一九四四年(昭和十九年)北九
 州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。
 工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム(株)足
 柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の
 十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情
 報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。その
 かたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看
 板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所
 (<http://xyntex.com>)を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」(第3回) 2007/11/1

改 2007/12/20

改 2008/07/13

© 2007 藤田眞作 <http://xyntex.com>